



“ピンクとグレー”  
加藤シゲアキ 著、角川出版

藤井 美紗貴 (学部一年生)

この作品は、NEWSのメンバーが著した作品ですが、とてもアイドルが書いたとは思えないほど、きめ細やかで美しい情景描写や主人公大貴の内面の心情を繊細に表現されています。

小学校からの親友の大貴と真吾は雑誌の読者モデルをきっかけに芸能活動を始める。しかし、真吾は主役や歌手活動など芸能界を駆け上がっていく一方で、大貴はエキストラから抜け出せずにいた。やがて二人の気持ちが変わる。

違い決裂してしまう。そこから運命の歯車が狂いだし、衝撃の結末を迎えます。

本当の自分とまわりから見た自分とのギャップへの苦しみ、今まで一緒にいた親友が別の世界へ行ってしまふ寂しさや羨望などどこか共感してしまう、人間の心の奥の部分も鮮明に描かれていて読みやすいのでぜひ読んでみて下さい。



“虫眼とアニ眼”

養老孟司・宮崎駿 著、新潮文庫

新垣 さくら (学部一年生)

「いまの子どもは物心ついた頃からずっと『間に合わなくなる』って脅かされ続けている。そうやって育てられた子どもたちが、少女売春をやっているんです。」日本の社会病理の根底には、自然との距離の取り方の変化があった。

私たちが手に入れた生活は、百年前からのものじゃない。百年先の生活へ向けて、自然との共生を目指すべきだと気づかされる。



前半には理想のまちと家づくりのイラスト掲載。

虫眼をもつ解剖学者・養老孟司と、アニ眼の人・宮崎駿の対談集。生協にも置いてありました。

“はだしのゲン”

中沢啓治 著、汐文社

藤尾 春菜 (学部一年生)

私はこの本を小学校低学年の時と高校三年の時の二回読みました。両方とも読み出すと止まらなくなり、一気に一冊です。そして、周りの人に広めて読みました。私はこの本から戦争を忘れてほしくない、二度と繰り返さないでほしいということが伝わりました。

この本からは衝撃を受けます。同時に勇気を与えてもらえます。戦争に生きた悲惨な日々、それに立ち向かい一杯生きる少年が描かれています。



“新装版 ほぼ日の就職論「はたらきたい。」”  
ほぼ日刊イトイ新聞 著・編  
東京糸井重里事務所

丸本 千枝（学部一年生）

“これから、はたらく現場に出て行くとうとする若い人たちは、就職活動の「パターン」や「公式」ばかり知り過ぎてしまったような気がする。そこには、楽しいという話が、欠けてるんじゃないか。”

監修者の糸井重里さんの言葉です。

この本は、HP「ほぼ日刊糸井新聞」で連載された、「ほぼ日の就職論」での五つの対話が元となっています。就職論

という言葉から連想されるような、堅苦しい内容の本では決してありません。むしろ楽しく読むことができる、特異な「就職本」だと思います。

「大切にしてきたものは、何ですか？」この質問が、この本のテーマです。

「はたらくこと」について深く突き詰めていくと、自分の「大切にしてきたもの」が問われるのだとわかった一冊でした。



### “想像ラジオ”

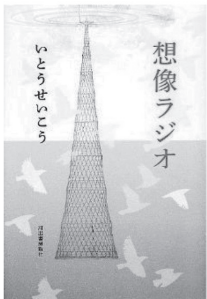
いとうせいこう 著、河出書房新社

三山 まりこ（学部一年生）

テレビや舞台でも活躍されている、いとうせいこうさんの待望の新作です。

軽快な口調のDJアークが語り始めるラジオ番組、想像ラジオ。文章で書かれているのですが、本当にリスナーになつてラジオ放送を聞いているような気分できくさと読み始めることができます。この本のテーマは生と死に耳を澄ませること。ヒロシマ、ナガサキ、トウホク……あの日の衝撃を再び感じさせられました。読んでいるうちに自然と物

語に引き込まれ、状況・時間などすべての関係がつながったとき、ぞっとするような感覚を味わいます。この本は読み手の想像力にすべてが委ねられていて、読み手の頭の中でそれぞれ思い浮かべる人がいたり、特別な思い出がよみがえってきたり……。何気ない日々のありがたさや家族の大切さに気付かせてくれる本だと思います。ぜひ読んでみてください。



“10代にしておきたい17のこと”  
本田健 著、だいわ文庫

森田 みなみ（学部一年生）

十代は、あらゆる可能性に満ちている時代。あなたには、何にでもなれる可能性があります。言い換えれば、夢の扉があなたの目の前にいくつも用意されていており、そのドアを開けるかどうかはあなた次第だということです。あなたは自分の人生を、思い通りにデザインすることが出来るのです。

私はこの文章を読みはっとしました。この残り少ない十代をどう生きていくべきかを考え実行しなければなら

ないと強く思いました。この本はそんな時、具体的にどうすべきか教えてくれました。

この本のシリーズには、二十代、三十代版もあります。たくさんの方がこの本を読み、たった一度きりの人生を無駄にせず大満足して生きていつてほしいです。



### “ファーストフードの恐ろしい話”

剣崎次郎 著、彩図社

渡邊 恭平（学部一年生）

暑いしシェークでも飲みたいなく、と思っていた矢先、西図書館で見つけて思わず借りてしまった本です。十三年間ファーストフード業界に携わり、数多くの店の経営に関わってきた著者が実際に体験した、ファーストフード業界の信じられない話がどっさり記されています。

店舗で起きた事件や、奇妙な行動をとる客や店員など、恐ろしくも面白い話は、自分には想像もつかなかった世界が身近にあることを気付かせてくれます。目

次を見て気になるところから読んで大丈夫です。また、自分が著者の立場だったら、迫りくる困難な課題をいかに解決するかを考えながら読むのも面白いです。ファーストフードの負の側面を知ってもなお、凄まじい体力と忍耐で業務をこなす著者のような方々の存在を知ると、ハンバーガーを食べなくなるから不思議です。

